

開催日：11月3～4日 開催場所：スピードパーク恋の浦 格式：国内 主催：MSH [クラブ登録No.加盟43008]、TOBIUME [クラブ登録No.加盟40023]、RASCAL [クラブ登録No.加盟40010]

フォト／西野キヨシ レポート／太田進之介

全日本ランカーがひしめき合うSC2クラスで、オーバーオールベストを叩き出して有終の美を飾った橋本和信選手。



橋本和信ランサーがホームで7年ぶりにJAFカップを制す!

九州地区では8年ぶりの開催となり、大牟田以来のJAFカップとなった今回のオールスター戦は、地元勢が口を揃えて指摘する通り「過去に例がない」ほど絶好のコースコンディションを維持。イベント開催週に入ってから一切の降雨もなく、土曜の公開練習でも強い日差しが照りつけ固く締まったダート路面は、トップドライバーたちの競演に相応しい超高速バトルを予感させた。

日曜決勝のコース設定は、パドック側からスタートしたマシンが元クロスカントリーコースだったという大きな斜度の山を駆け上がると、眼下に玄界灘を臨むシーサイドコーナーを反時計回りに、ギャラリーの待つ坂下のヘアピンへ



SC2 / 1.好調な兆しを見せていた梶岡悟選手だったが、悔しいシフトミスでコンマ289届かず2位。2.3位は1本目でベストを出したものの逆転が叶わなかった吉村修選手。3.SC2クラス入賞の皆さん。

と全開で進入。再び山を駆け上がると、今度はコース奥側の斜面となる名物“大坂落とし”を豪快に駆け降り、時計回りにテクニカルセクションへと突入。インフィールドでは右へ左へとタイトな島回りをクリアした後、最終コーナーとなるシケインを攻略してフィニッシュラインと

なる、地元勢も「いやらしくて難しい」と評するコース全長2000m越えのレイアウトとなった。

ヒート1出走時点で気温13℃の微風が、午後の2本目開始時にはやや風が強まったものの気温は20℃を越え、散水車の水もすぐに干上がるほどの乾燥したコンディションで競技は進



SC1 / 4.優勝は全日本選手権とダブルタイトル獲得となった山崎迅人選手。5.ST202セリカを駆る則信重雄選手は2位。6.3位は大久保勇作選手。7.SC1クラス入賞の皆さん。



PN1 / 8.他選手の追従を許さなかった工藤清美選手が優勝。9.PN1クラス入賞の皆さん。10.2位は太田智喜選手。11.内藤修一選手が3位。PN2 / 12.2位は今村宏臣選手。13.濱口龍一選手が3位。14.優勝は1秒以上の差をつけた河石潤選手。15.PN2クラス入賞の皆さん。



Women / 16.秋竹純選手が2位。17.3位は古賀かおり選手。18.優勝は2分を切る好走を見せた人見雅子選手。19.Womenクラス入賞の皆さん。

2018年JAFカップオールジャパンターボトライアル IRC全国オールスターターボトライアル IN九州

2018年JAFカップオールジャパンターボトライアル IRC全国オールスターターボトライアル IN九州

D / 20.コンマ056差の逆転優勝を果たした河内渉選手。21.Dクラス入賞の皆さん。22.2位は五味直樹選手。23.江川博選手が3位。

み、各クラスとも午後大きくタイムアップする実質2本目勝負の1日となった。

全日本ランカーが参戦して地区戦チャンプ勢との熾烈なタイムバトルを展開したPN1クラスは、1本目中盤に登場して中間ベストの52秒582からターゲットとなる1分58秒491を記録した北海道の内藤修一選手を皮切りに、今季の各地区チャンピオンが続々登場。

しかし、これが初の恋の浦という中国チャンピオン山谷隆義選手が前半のヘアピン立ち上がりで車速を乗せられず失速すると、これでリズム

を乱したか最終シケインにヒットしストップ。再始動まで一瞬掲示された赤旗を目にした、オーバーラップスタートの地元九州王者・中国康太郎選手は再出走に回ること。

そんな地区チャンプたちの混戦を尻目に、誰もいないクリアなコースに飛び出していった広島市の太田智喜選手、青森の工藤清美選手から全日本の猛者たちが次々とベストタイム更新。

2本目に逆襲の望みを託した内藤選手が再びの中間ベスト51秒695から、最後の島回りをコンパクトにまとめ1分53秒330と再び首位

浮上に成功するも、最終走者2名の壁は厚く、今季2台目のデミオに乗る“デコイチ”こと太田選手と、今季からホンダ・フィットにスイッチした2017年全日本SA1王者の工藤選手がまたしてもタイム更新を果たし、GK5フィットが唯一の1分51秒台をマーク。

「今季はフィットに乗り換えてなんとか勝ちたいと思っていたので、最後にJAFカップが獲られて良かったです。1700km、22時間かけて自走してきた甲斐がありました(笑)」と、元SC1クラス5連覇の貫禄を示す勝利を飾った。



N1 / 24.優勝は2本ともトップタイムの濱口雅昭選手。25.N1クラス入賞の皆さん。26.2位は川本圭祐選手。27.橋本英樹選手が3位。N2 / 28.2位は北條倫史選手。29.影山浩一郎選手が3位。30.JAFカップ初優勝となった岸山信之選手。31.N2クラス入賞の皆さん。



SA1 / 32.全日本チャンプの小山健一選手が優勝。33.SA1クラス入賞の皆さん。
 34.2位は田口和久選手。35.川口昭一選手が3位。SA2 / 36.2位は浜孝佳選手。
 37.石田祐輝選手が3位。38.1本目のベストタイムで逃げ切り優勝の黒木陽介選手。
 39.SA2クラス入賞の皆さん。

SA1の小山健一選手や、SC1の山崎隼人選手らと同じく、今季の全日本チャンピオンとしてJAFカップとのダブルタイトルを狙う北條倫史選手が北海道からエントリーしたN2クラスは、全日本でも今季ライバルとして立ちはだかった九州の新鋭、岸山信之選手とのバトルが焦点に。

すでに砂埃が立ち路面にブラックマークが現れるほどのサーフェスでありながら、このランサー勢クラスは軒並みウエットタイヤとなる74Rをチョイスして勝負に臨んだ。

1本目はそのラス前ゼッケンとなる岸山選手や浜田隆行選手らが1分47秒台だったのに対し、クラス2番手ゼッケンながらJAFカップ優勝経験も持つ大ベテラン、今福和彦選手が豪快なスライド走法で1分46秒475のタイムを刻み暫定首位をキープ。それに対し最終走者の王者・北條選手は中間こそコンマ2秒の遅れを取るものの、落ち着いたドライビングで後半テクニカルセクションを攻略し、ひとり45秒台でベストを更新。

そのまま2本目も、上位勢はヘアピンをタイトに周りゼロステアでコンパクトに立ち上がるさすがの腕前でベスト更新合戦となり、岸山選手が中間45秒275を記録すると島回りもノーマスでまとめ1分43秒714の好タイムをマーク。すでに後半セクターに差し掛かっていた最終走者の北條選手もロスの少ないドライビングでフィニッシュを目指すも「なぜあんなところでリアが動いたのが理解できない」と、シケイ

ンでまさかのスライドを喫し2番手。地元在住で恋の浦は「家から15分」という岸山選手の勝利となり、北條選手は惜しくもJAFカップを逃す結果となった。

「今年は全日本開幕戦で初優勝もでき、その後は鳴かず飛ばずでシーズンは3位でしたが、このJAFカップは恋の浦で初開催ということで、ぜひ獲りたいと思っていました。来年の全日本にも繋がる結果だと思いますし、今度はその後のJAFカップ(北海道の砂川で開催決定)にも何十時間かけて伺いますので、その際はよろしくお祈りします」と、今季の全日本王者にメッセージを贈った。

そして砂塵舞う後半クラスで、そのピークパワーを路面に叩きつけた4WDターボ勢のSC2は、全日本の大ベテラン梶岡悟選手がまさかの苦戦。1本目はラス前ゼッケンの吉村修選手が抑制の効いたサイドターンで島回りをコンパクトに収めベストを記録すると、2本目には中段ゼッケンの地元勢、モータースポーツ・ハシモト代表の橋本和信選手が躍動し、44秒188の中間ベストから島回りの細かなターンをすべて豪快なノーズターンでクリアし、1分40秒681のオーバーオール・ベストを記録。



各クラス優勝者 / 40.Women・人見選手。41.PN1・工藤選手。42.PN2・河石選手。
 43.N1・濱口選手。44.N2・岸山選手。45.SA1・小山選手。46.SA2・黒木選手。47.SC1・山崎選手。48.SC2・橋本選手。49.D・河内選手。

これに重圧が掛かったか、最終前走者の吉村選手はターンでわずかに引掛かりロスを喫すると、ラストゼッケンの梶岡選手もヘアピン脱出でシフトミスを犯し万事休す。戻りのテクニカルでもワイドとなるなどリズムを乱し、橋本選手がホームコースで2011年以来となるJAFカップを手にした。

「地元の部会長も務めていますが、今回は無理を言って走らせてもらいました。これで切腹せずに済みます(笑)」と橋本選手が語れば、敗れた梶岡選手は「今回はカツ(全日本でタイトル争いを展開した田口勝彦選手)がいないので、JAFカップを獲って東京(のJAF表彰式)へ行こうと思っていたんですが、また負けてしまいました。(広島)カーブが負けたのもツライけれど、今日の負けも悲しい」と、ガックリ肩を落とす結末となった。

JMRC全国オールスターダートトライアル&JMRC地区対抗戦



B2 / 50.矢野浄一郎選手が優勝。51.B2クラス入賞の皆さん。B3 / 52.優勝は辰巳浩一郎選手。53.B3クラス入賞の皆さん。

JMRC地区対抗戦は中国&四国地区が優勝した。